

## 親鸞における智慧

紅 棧 英 顕

### はじめに

周知のように、法然の意を忠実に継承し、自力で智慧をみがく道棄てた親鸞であるが、『正像末和讃』に

釈迦・弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる 信心の智慧に  
りてこそ 仏恩報ずる身とはなれ

智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり 信心の智慧なかり  
せば いかでか涅槃をさとらまし (真聖全二の五二〇)

等と述べて、自力で智慧をみがくのではないが、他力(他力回向)による智慧の重要性を述べているのである。

信心決定によって現生正定聚に住することを主張し、現世からの救済を強調したのが親鸞であるが、『一念多念文意』には

凡夫といふは無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず (真聖全二の六一八)

と臨終の一念にいたるまで煩惱具足の身である事も強調したのである。煩惱具足のままであると述べながら、そこに「信心の智慧」、「智慧の念仏」を語っているのである。この「智慧」が実生活の上にとどのよう<sup>(1)</sup>に顕現するのであるかについては、種々論じられるのであるが、未だ見解はまちまちである。本稿では親鸞が独自の見解をなしている明信仏智、不了仏智の問題を中心に上げて考察することにより、親鸞における「智慧」の意味を明らかにしたいと思う。

### 一 造悪無碍に対する親鸞の戒め

親鸞の帰洛後の関東において造悪無碍の主張が横行したようである。それを戒めて親鸞は

むかしは弥陀のちかひをもしらず、阿弥陀仏をもまふさずおはしましさふらひしが、釈迦・弥陀の御方便にもよをされて、いま弥陀のちかひをもききはじめておはします身にてさふらふなり。もとは無明の酒にえひて貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみこのみめしあふてさ

ふらひつるに、仏のちかひをききはじめしより、无明のえひもやうやうすこしづつさめ、三毒をすこしづつこのまづして阿弥陀仏のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふてさふらふぞかし。

(真聖全二の六九〇)

と述べているのである。ここでは、弥陀のちかひをきくことにより「三毒をすこしづつこのまづして阿弥陀仏のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふてさふらふぞかし」と述べ、聞法により人は煩惱からとおざかるという意が述べられている。また次下には

また往生の信心は釈迦・弥陀の御すすめによりておこるとこそみえてさふらへば、さりとともまことのころおこらせたまひなんには、いかがむかしのおんころのままにてはさふらふべき。

(真聖全二の六九一)

等と述べられてもいるように、信心決定したならば昔の心のままであるはずはない。必ずかわるのであるとも述べている。このように造悪無碍を戒めるに際して、信心を獲得すれば必ず心は変わるものだと述べているのである。

しかし上述のように『一念多念文意』に述べられているように、臨終の一念に至るまで煩惱具足であることを強調したり、また『愚禿悲歎述懐』に

悪性さらにやめがたし　ころろは蛇蝎のごとくなり　修善も雑毒なるゆへに　虚仮の行とぞなづけたる

(真聖全二の五二七)

親鸞における智慧(紅 楨)

と、善導の「散善義」至誠心積等を独自の読み方によって自己の煩惱性、罪悪性を強調したのが親鸞である。

このように信後においても罪悪深重、煩惱であることは変わらないことを強調したのが親鸞ではあるが、上述のように、造悪無碍の異義者に対しては、信心を得たならばかわるものだ戒め、信後に変わりがあるものと述べているのである。

二 『易行品』の「若し人善根を種えて、疑へば則ち華開けず、信心清浄なる者は、華開けて則ち仏を見たてまつる」(真聖全一の二六〇)について

この文は『教行証文類』「行巻」(真聖全一の二三)と『浄土文類聚鈔』(真聖全二の四四四)に引かれているものである。これは明信仏智の文と言われているものであるが、ここに顕す行(念仏)は、信心を具足した行信不二であると言ふ事を示したものである。親鸞は「散善義」二河譬の「喩衆生貪瞋煩惱中、能生清浄願往生心」(真聖全一の五四〇)の文を釈して

能生清浄願往生心言ふ者、金剛の真心獲得する也。本願力回向の大信心海なるが故に破壊す可からず。 (信巻) 真聖全一の六七) 能生清浄願往生心は、是凡夫自力の心に非ず、大悲廻向の心なるが故に清浄願心と言へり。 (浄土文類聚鈔) 真聖全二の四五二)

と述べ、「散善義」当面では衆生の自発の「清浄願往生心」を

親鸞における智慧（紅 様）

本願力廻向の信心としてしているのである。

『愚禿悲歎述懐』に

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身  
にて 清浄の心もさらになし  
(真聖全二の五二七)

等と述べているように、深く自己を内省し、清浄なる信心を起すことも、自分の貪瞋煩惱の中に、自分の力によって清浄願往生心を生じさせることも到底不可能なことに悩んだことであろう。これが解決したのが「本願力廻向の大信心海なるが故に破壊す可からず。」であり、「大悲廻向の心なるが故に清浄願心と言へり。」と述べている所のものである。貪瞋煩惱熾盛の自分の心に生じた清浄心、清浄願往生心は自分の心ではない、弥陀の大悲廻向の心であると感じとったのであろう。

### 三 明信仏智と不了仏智

明信仏智、不了仏智については『大経』（『無量寿経』）下巻の胎化得失（真聖全一の四三以下）に述べられている。明信仏智の人は化生（報土往生）の人であり、不了仏智の人は胎生（化土往生）の人である。

親鸞は胎化得失の文を不了仏智を戒めるための文として扱っている。この文の大部分を『教行証文類』「化土巻」要門釈下（真聖全二の一四五）、真門釈下（真聖全二の一五八）と、『浄

土三経往生文類』の略本（八十三歳書写）の弥陀経往生釈下（真聖全二の五四八）及び『浄土三経往生文類』の広本（八十五歳書写）の弥陀経往生釈下（真聖全二の五五八）に引用している。『浄土三経往生文類』の広本では二十願成就文としていているので、親鸞は最終的にはこの胎化得失の文を二十願成就文としたことが明らかである。

化生の人と胎生の人について「化土巻」には

弥勒当に知るべし、彼の化生の者は、智慧勝れたるが故に。其の胎生の者は皆智慧无きなり。  
(真聖全一の一四五)

と述べ、また『正像末和讃』三時讃に

不思議の仏智を信ずれば 正定聚にこそ住しけれ 化生のひとは智慧すぐれ 无上覚をぞさとりける  
(真聖全一の五二一)  
不思議の仏智を信ずるを 報土の因としたまへり 信心の正因うることは かたきがなかに なをかたし  
(同上)

と述べ、『正像末和讃』誠疑讃には

仏智を疑惑するゆへに 胎生のは智慧もなし 胎宮にかならずむまるるを 牢獄にいとたとへたり  
(真聖全一の五二四)

と述べられているように、「化生のひとは智慧勝れ」、「胎生のひとは智慧無し」と述べている。そして親鸞の主張の特質である唯信による信心正因義がここで述べられているのである。

## 『正像末和讃』 誠疑讚に

本願疑惑の行者には 含花未出のひとつもあり 或生辺地ときらひつ  
つ 或墮宮胎とすてらるる (真聖全三二の五二四)

仏智を疑惑するゆへに 胎生のものは智慧もなし 胎宮にかならず  
むまるるを 牢獄にいとたとへたり (同上)

弥陀の本願信ぜねば 疑惑を帯してむまれつつ はなはずなはちひ  
らけねば 胎に処するにたとへたり (同上)

等と「本願疑惑の行者」、「弥陀の本願信ぜねば」と言う語がここに使われている所から、親鸞においては不了仏智（仏智疑惑、胎生）の人が本願疑惑の人であり、智慧のない人としていることが分かる。そして「不思議の仏智を信ずれば 正定聚にこそ住しけれ 化生のひとは智慧すぐれ 无上覚をぞさとりける」（真聖全二の五二二）とある所から、明信仏智（化生）の人が眞実信心の人であり、智慧勝れた人であり、眞実報土の往生決定の人としていことが明らかである。

このように親鸞は明信仏智の人を眞実信心の人（十八願の機）として、智慧勝れた人とし、不了仏智の人を本願疑惑の人（二十願の機）とし、智慧なき人としているのである。

親鸞のいう「信心の智慧」により、人はどう変わるかについて、取り敢えずはつきり言えることは本願力廻向の利益により智慧勝れた人、明信仏智の人となるのである。即ち不了仏智の本願疑惑心が全く疑惑の晴れた（消滅した）人となると

親鸞における智慧（紅 椽）

いうことが言えると思われる。

## 四 痴无明と疑無明

无明は十二縁起の第一に述べられている根本煩惱のことである。ところが親鸞においてはこの无明について痴无明（総無明、通途）、煩惱妄念の心と、疑無明（別无明、別途）、本願疑惑の心の二義ありとする考えが古来ある。

私はかつて二義ありとする考えにより意見を述べたことがあるが、近年村上速水氏により二義に分けることに反対する意見が発表された<sup>(3)</sup>。これに賛成する意見も最近みられるのであり、信心の智慧を考察する上で関連が深いと思われるので、以下この問題について私見を述べる。

村上氏の見解は親鸞における无明とは全て煩惱（痴无明、煩惱妄念）の意味であるとし、別義として本願疑惑の心（疑無明、不了仏智）を立てることに反対するものである。そして无明の語を疑無明の意とする代表的なものと考えられる『正信偈』の「已能雖破无明闇」（真聖全二の四四）の「无明」について、これを本願疑惑の心とはせず、この「破无明闇」の破はなくなってしまうというのではなく、あれど障礙とはならぬと言う意であり、この无明は本願疑惑の心（疑無明、不了仏智）ではなく、通途の煩惱妄念の心であると主張するのである<sup>(4)</sup>。

しかし親鸞自身が『正信偈』のこの部分を釈した『尊号真

像銘文』（広本）に

「攝取心光常照護」といふは信心をえたる人をば、无導光仏の心光つねにてらし、まもりたまふゆへに、无明のやみはれ、生死のなきよすでにあかつきになりぬとすべしと也。「已能雖破无明闇」といふはこのころなり。（真聖全二の六〇）

とある。ここに「无明のやみはれ、生死のなきよすでにあかつきになりぬとすべしと也。已能雖破无明闇といふはこのころなり。」とあるように親鸞自身がこの「破无明闇」を「无明のやみはれ」と註釈しているのであるから、村上氏の言うように「あれど障礙とはならぬと言う意」ではなく、「无明のやみ」はなくなるという意に他ならないのである。これに関連することであるが、同じ『尊号真像銘文』（広）の源空聖人真影下に劉官（隆寛）の讚が引かれ、その中にある「疑雲永晴」とある「永晴」を親鸞が説明し「永晴といふはうたがふこのころのくもをながくはらしむれば、安楽浄土へかならずむまるる也」（真聖全二の五九五）と述べている。上の「无明のやみはれ」の「はれ」も「晴れ」の意味であるから、「无明のやみはれ」とは闇が晴れてなくなると言う意味であることがより明らかである。従ってこの无明は信心によってなくなる无明であるから、煩惱妄念の痴无明と異なる信心決定によって払拭され消滅する本願疑惑の心である疑無明、不了仏

智に他ならないのである。

右に論じたように『正信偈』の「已能雖破无明闇」の「无明」が親鸞の述べる別義の无明（本願疑惑心）の代表的用例であるが、その他確実な用例として『教行証文類』「行巻」の

爾れば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち无明の闇を破し、速やかに无量光明土に到りて、大般涅槃を証す。（真聖全二の三五）

とある文を上げることが出来る。「无明の闇を破し、速やかに无量光明土に到りて、大般涅槃を証す」とあるように、浄土に生まれる前に「无明の闇」が晴れてなくなるという意味であるから、この「无明」は煩惱妄念の意味ではない。本願疑惑の疑無明、不了仏智の意味に他ならないのである。このように親鸞においては无明について痴无明（総無明、通義）と疑無明（別无明、別義）の二義があることが明らかである。要する本願力廻向により、信心の智慧に恵まれ明信仏智の人となり、本願疑惑（不了仏智）の心の消滅した人となるのである。

## 五 両重因縁釈について

『教行証文類』「行巻」両重因縁に

良に知んぬ、徳号の慈父無しまさずば能生の因闕けなむ。光明の悲母無しまさずば、所生の縁垂きなん。能所の因縁和合す可しと雖も信心の業識に非ずば光明土に到ること無し。真実信の業識、斯れ則内因とす。光明名の父母、斯れ則ち外縁と為す。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。  
(真聖全二の三三)

とある。これは我々の信心は阿弥陀仏の光明名号の働きによって生ずるものであることが述べられているのである。

### 覚如の『口伝鈔』三に

一、无導の光曜によりて无明の闇夜はるる事。(中略) 无導光の日輪照触せざるときは永々昏闇の无明の夜あげず。しかるにいま宿善ときいたりて不断難思の日輪貪瞋の半腹に行度するとき、無明やうやく闇はれて信心たちまちあきらかなり。(中略) 日輪の他力いたらざるほどはわれと无明を破すいふことあるべからず。无明を破せずば出離その期あるべからず。  
(真聖全三の四)

とある。ここには「無明やうやく闇はれて信心たちまちあきらかなり」「无明を破せずば出離その期あるべからず」等とあるように、ここでは「无明」ははっきり疑無明(本願疑惑の心)の意味で語られているのである。

光明名号によって信心は生ぜしめられるということと「無明やうやく闇はれて信心たちまちあきらかなり」とある文から考察すると『教行証文類』総序の冒頭の

竊に以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船 无導の光明は無明の闇を破する恵日なり。  
(真聖全二の一)

とある无明の闇の「无明」も疑无明と考えるのが妥当のように思われる。親鸞の『教行証文類』制作の目的は広大の仏恩に謝せんがため、救済を体得した自身の慶びを述べんがためである。特に総序においては次に

噫、弘誓の強縁多生にも値ひ巨く、真実の浄信億劫にも獲巨し。遇たま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。若也、此廻疑網に覆蔽せられば、更復曠劫を逕歴せん。  
(真聖全二の一)

と述べているように、信心獲得、明信仏智、本願疑惑心(疑无明)の消滅の慶びを述べているのである。この「疑網」は冒頭の「无明の闇」の「无明」と同義なのである。このことから考えれば総序冒頭の无明も痴无明ではなく、疑无明の意と考えるのが自然であろう。

親鸞の述べる无明には通(煩惱妄念)と別(本願疑惑)の二義があり、二義に通ずると思われる用例が多いが、その場合親鸞の意は多くは別(本願疑惑)にあったと考えるべきではないかと考える。信心決定、本願疑惑心の消滅が親鸞の一番大きな課題であったと考えられるからである。

親鸞における智慧（紅 楳）

## 六 仏恩報ずる身になるといふこと

はじめに『正像末和讃』に

釈迦・弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる 信心の智慧にいりてこそ 仏恩報ずる身とはなれ  
（真聖全二の五二〇）

とあることを述べた。『教行証文類』「信巻」には

金剛の真心を獲得すれば横に五趣八難の道を超へ、必ず現生十種の益を獲。  
（真聖全二の七二）

とあり、その第八番目に「八には知恩報徳の益」と、信心獲得者の現生の利益として「仏恩報ずる身になる」ことが述べられているのである。

上來論じたように私は「信心の智慧にいる」ということは「不了仏智」（智慧无き人）から「明信仏智」（智慧勝れた人）になることと考える。則ち本願疑惑心の完全に消滅した第十八願の機になることである。親鸞が「信心の智慧にいりてこそ仏恩報ずる身とはなれ」と述べていることは、信心決定によって顕現する第一のものが「仏恩報ずる身」となることであると感得したのであろう。このことは『教行証文類』総序に

真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳深きことを知んぬ。

とあり、「化土巻」三願転入の文には

爰に久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝せんがために真宗の簡要を摠うて恒常に不可思議の徳海を称念す。  
（真聖全二の一六六）

等とあることにもより、このことが明らかであろう。

近年、称名報恩思想が親鸞には無かったとする意見があるが、<sup>(5)</sup>これには全く賛成しかねる。

### むすび

以上、親鸞の述べている智慧について考察した。親鸞は自己の罪悪性、煩惱性を強調して自力で智慧をみかく道を棄てたのである。「信心の智慧」、「智慧の念仏」と述べているが、これは自己の力によるものではなく阿弥陀仏の本願力の廻向によるとするものである。上に述べたように親鸞は造悪無碍者に対して信後においては悪のままでは無く善に変わるものだ<sup>(6)</sup>と戒めている。しかし『一念多念文意』等においては、臨終の一念にいたるまで罪悪性、煩惱性に変わりがないことが強調されている。信心によって変化はあるのであるが、信後も煩惱具足の凡夫であることには全く変わりはないと述べている。

今回私はこの問題を「明信仏智」、「不了仏智」に関連させて考察した。親鸞は明信仏智の人（化生の人、第十八願の機）は智慧の勝れた人であり、不了仏智の人（胎生の人、第二十願の機）は智慧のない人としてしているのである。智慧の勝れている人は明信仏智の人であり、智慧なき人とは不了仏智の人、即ち本願疑惑の人なのである。このことから親鸞の言う「信心の智慧」とは本願力廻向により「不了仏智」（本願疑惑心）を消滅せしめた「明信仏智」の智慧と考える事が出来よう。『教行証文類』総序の「若也、此廻疑網に覆蔽せられれば、更復曠劫を逕歴せん」とある文も本願力廻向の明信仏智の智慧により、不了仏智（本願疑惑心）、即ち「疑網」（疑無明、本願疑惑心）が消滅された慶びを述べたものと言えらるであろう。

「信心の智慧」により、人が如何に変わるのであるかについては、広い範囲の考察が必要ではあるが、はつきり言えることは「不了仏智」の人が本願疑惑心の消滅した人となることであり、また仏恩報ずる身となり報恩念仏の人となることであると言えらるであろう。

- 1 拙稿「親鸞における信心の智慧について」（『日本仏教学会年報』第七三号、二〇〇八年六月）参照。
- 2 拙稿「親鸞における疑蓋無雑について」（『印度学仏教学研究』第二六卷第一号、一九七七年十二月）、同「親鸞における疑蓋無雑について（二）」（『印度学仏教学研究』第二八卷第一号、

親鸞における智慧（紅 椽）

一九七九年十二月）。

- 3 村上速水「真宗無明義に関する一試論——痴無明と疑無明の問題——」（『龍谷大学論集』第四一二号、一九七八年五月）一頁以下。
- 4 村上速水前掲論文、一四頁。尚、村上氏は「無明の闇はれとは、無明を無明と知ったということではないであろうか、（中略）それに気づかなかつたものが、今まさに煩惱具足の身と信じたこと、それが無明の闇はれた相ではないか、つまり自力無功と信じたことであり、それはとりもなおさず、機の深信にほかならない」（同、一三頁）と述べているが、機の深信は法の深信と一具であり、煩惱具足と信じた単なる罪悪感ではないのである。本願疑惑心（疑無明）はそこには全く存在しないのである。このことから氏の考えには賛成しかねる。
- 5 信楽峻磨『真宗求道学』（法蔵館、二〇一一年九月）等。

〈参考文献〉

『仏教と智慧』（日本仏教学会編、二〇〇八年八月）

〈キーワード〉 智慧、明信仏智、不了仏智、痴無明、疑無明

（相愛大学名誉教授）